

2019年3月12日

藤井誠一郎

「第13回全国大学まちづくり政策フォーラムin京田辺」参加報告

2019年3月3日（日）～5日（火）、京都府京田辺市にて、全国から10大学、19チーム、122名の学生が参加した「第13回全国大学まちづくり政策フォーラムin京田辺」が開催されました。

当該政策フォーラムは、京田辺市全域をフィールドとして、地域が抱える多種多様な課題について調査研究を進めて問題を把握し、それを解決していくための政策を提言し、全国から参加する大学と提案する政策の質を競い合う形で進められていきます。限られた時間の中で精力的に地域に出て調査やヒアリングを行い、プレゼン用のパワーポイントファイルまで作成し、大勢の人の前で発表までします。大変なハードワークとなります。限られた時間をどのように効率的に使うのかを考えて行動し、最終日の発表に向けた準備を進めていきます。それが徹夜作業になることもあります。このような極限の状況の中で、作業を進めていくこととなります。よって、最終日の発表が終わったときの達成感はひとしおです。それとともに、普段教室では経験することができない実践的なスキルを積むこともでき、自らが成長を遂げていることも自覚できるものとなります。

参加した大学は、同志社大学、同志社女子大学、福知山公立大学、埼玉大学、日本大学、龍谷大学、摂南大学、大阪国際大学、金城学院大学、と大東文化大学で、本学からは、政治学科2年生岡田悠志君、政治学科2年生高橋祐介君、政治学科2年生大柴梨那さんの3名が参加しました。

今回の京田辺フォーラムでは、「まちづくりを活性化させる公共事業の進め方について」、「在住外国人にとっての安心・安全なまちづくりについて」、「超高齢化社会を支えるコミュニティの構築について」の3つのテーマから1つを選択して政策提言を行うことになっていました。本学のチームは「超高齢化社会を支えるコミュニティの構築について」を選択し、農業の持つ多面的な効果を活用した政策提言を進めていきました。

2月上旬から準備を始め、メンバー一同で議論を重ねたり、練馬区で体験農園を営んでいる「白石農園」へヒアリングにいたり、出発前の準備をしっかりと行って京田辺にのりこみました。とりわけ岡田君は、アクティブ・ラーニングの政策提言型プログラムの意義を理解し、2018年夏の登別政策フォーラムに1人（個人）で参加していたのですが、惜しくも入賞を逃したため、今回はそのリベンジで京田辺にリーダーとして参加していました。登別で積み重ねた岡田君の経験を基にスムーズなチーム運営がなされ、非常に順調に準備が進んでいきました。

いよいよ3月3日（日）からフォーラムが始まり現地調査活動が開始となりました。これまでに育んできたチームワークで、近鉄新田辺駅前でのヒアリング調査、京田辺市の農政課へのヒアリング、現地活動団体へのヒアリングとスムーズに調査活動を進めていき、発表の段階まで辿り着きました。これまで参加した中で一番スムーズに行ったのではないかと思います。

3月5日（火）の発表は19チーム中、18番目となりました。大柴さんが壇上で発表する役

割を担い、これまでみんなで策定してきた「政策」を審査員、学生、地域の方々の前で発表しました。私の横で聞いていた一般の方は、「すごく分かり易い」と言っておられましたし、ある程度の水準には達していた発表と思えました。

いよいよ審査結果の発表となり、4つの賞が発表されていきました。残る最優秀賞までチーム名が呼ばれなかったので、「もしかしたら最優秀賞か！」と思っていたのですが、残念ながら本学のチーム名は呼ばれませんでした。大変残念でした。どの点が不十分だったのかが分からず、どう受け止めて良いのか分からない状況でした。

残念ながら入賞は逃しましたが、発表が終わった後のメンバーの写真を見て頂くとわかるとおり、参加メンバーは「やり遂げた」という大きな達成感を覚えていました。結果がどうであれ、自らの前に立ちはだかる壁に真摯に向き合い、それを乗り越え、結果を出していくという経験を積むことができたのではないかと思います。これから社会に出ると、自らの前には壁ばかりが出てくると思います。そのような時には今回の経験を基にして、結果を出していく人材として社会で活躍してほしいと思います。今回のフォーラムに参加して経験を積んだことで、それができる資質を涵養できたのだと思えます。今後の活躍が楽しみでなりません。

詳細の活動につきましては、参加メンバーで分筆したものを一部藤井が編集して報告します。

3月3日(1日目)

正午前、メンバーは京都駅で藤井先生と合流し、近鉄京都線で京田辺市へ向かいました。京都市内の都会的なビルが立ち並ぶ縦長い光景から田畑が広がる横長い光景へと徐々に変化していきます。

最初に訪れたのは、主に地元で収穫した農産物を販売している「普賢寺ふれあいの駅」です。店内には新鮮な野菜や加工品が生産者の写真付きで沢山並べられていました。従業員のの方に話を聞くと、生産者はふれあいの駅に出資することで自らが収穫したものを店頭で並べられるとのことでした。また、京田辺市の特産品である、えび芋や高級玉露なども販売されていました。



普賢寺ふれあいの駅の外観



特産品の1つであるえび芋

14 時頃、発表会場となる同志社大学京田辺キャンパスに移動し、政策フォーラムの開会

式に参加しました。我々が普段通う大東文化大学東松山キャンパスも十分広いと感じますが、それ以上に広大なキャンパスに驚かされました。他大学の参加学生がパソコンを囲んで熱心に議論をしている様子を見て、「自分たちも頑張らねばいけない」と気合いが入りました。

開会式終了後、新田辺駅に移動し街頭インタビュー調査を行いました。事前に、過去のフォーラムに参加経験のある岡田君や先輩方から「地獄だった」「もう二度とやりたくない」などの感想を聞かされていたため非常に不安でしたが、1時間も続けていると声をかけることに慣れてきはじめ、最終的には開始前の目標 20 人を上回る 33 人の方にインタビューをすることができました。藤井先生にも「この経験は今後必ず生きる」と言っていただき、実施して本当に良かったなと感じました。



インタビューの様子①



インタビューの様子②

その後再び同志社大学に戻り、他大学との夕食を交えた懇親会を終え、京都市内の宿泊場所に向かいました。「せっかく京都に来たのだから少しくらい観光しよう」ということで、小雨降る中 3 人で夜の八坂神社と祇園へ足を運びました。行きは地下鉄と京阪電車を利用しましたが、帰りは翌日に備えてタクシーでホテルに戻りました。



夜の八坂神社

3月4日(2日目)

2日目(4日)は全日ヒアリング調査を行いました。朝に市役所の農政課の方にお話を伺い、市民農園や体験農園の制度的な部分のお話を詳しくお伺いすることができました。その中で、「体験農園は現在農政課の方では確認しておらず、やられている方もいる可能性もある」とお聞きし、実際に京田辺市内の農家の方にお話をお聞きする必要があると考えました。

そこで、同志社大学内に設置されていた学生サポートデスクの高岡さんと吉村さんにお伺いしたところ、高船地区で農業を営む岡田さんと、天王地区で農地を一般の方に貸して農業をやられている久保さんに直接つないでもらうことができました。



吉村さんと高岡さんにお話を聞く様子



発表内容をプレゼンする様子

岡田さんにはその場ですぐに同志社大学へと来ていただき、厳しい環境での農業の難しさや、農家の方の率直な意見を伺うことができました。その後昼食を挟み、天王地区の久保さんの元へと向かいました。天王地区付近の打田地区、高船地区の急勾配な山道や、車が一台ようやく通れるようなとても狭い道をギリギリで通り抜け、久保さんの農地へと足を運びました。



久保さん所有の農地の様子



農作業をやられている方々

そこには雨の中笑顔で畑や竹林を耕している高齢者の方々がいらっしゃいました。そのいきいきとした姿を見た時に、「これが農業の持つ本当の力なのではないか」と強く思いました。またその方々の生の声を聞くことができ、私達の考えた政策に、より深みが増し、理論から実践への道筋が明確になったように感じました。

その後、同志社大学内にて発表原稿やスライドを作成し、ヒアリング調査で得た農政課の方の意見や農家の方々の意見をまとめ、さらに肉付けをしました。



久保さんご夫妻にお話を伺う様子



最終調整をする様子

幾度となく議論をし、ホテルに戻った後でも3人で集まり、何度も練習し微調整を繰り返しました。夜は深まり、5日の午前3時頃ようやく睡眠にありつけました。この辛さが政策フォーラムの醍醐味でもあるように感じました。

3月5日(3日目)

フォーラム最終日である、発表日を迎えました。この日は、朝8時30分に同志社大学に到着し、最後の発表練習を行いました。私たちの発表は19チームある中で、18番目であったため、発表への緊張を少し感じながら各チームの発表を聴いていました。

ついに18番目、私たちの出番となりました。私たちは京田辺市から与えられた「超高齢社会を支えるコミュニティの構築について」というテーマに基づき、生きがいを軸としたコミュニティの構築について提言をしました。特に、この提言がただの事業案にならないよう、3つの施策から1つの政策が成り立っていることを認識してもらえるようにパワーポイントを工夫しました。発表は大柴が担当し、パワーポイントは高橋君が担当、リーダーである岡田君はサポートと審査員からの質問への回答を担当しました。



発表時の様子



質疑応答の様子

発表原稿

それでは大東文化大学藤井ゼミの発表を始めます。

発表内容としてはこのような流れで進めさせていただきます。

今回のテーマは「超高齢社会を支えるコミュニティの構築について」ですが、その政策を提言するにあたって、私たちはまず、京田辺市で行われた、市民満足度調査の結果報告書を参照しました。それに加えて、3月3日に新田辺駅前にて、街角インタビューを実施しました。その結果、住民同士の深い交流はあまりないと答えた方が多くみられました。加えて、高齢者の体を動かす場所が少ない、住民の交流の場が欲しい、ご近所付き合いが希薄、などの意見が共通して見つかりました。このような問題を解決するに当たり、近郊農業の意義に関する授業を受けた際に、「農業は、生産だけにとどまらない、環境保全・癒し・

教育・福祉・健康などの多面的なめぐみを持っている」と学んだことを思い出しました。そこで私たちはこのことを活用し、「超高齢社会を支えるコミュニティの構築について」に向けた政策を提言しようと思います。

その政策とは「京田辺生きがいプロジェクト」という政策です。このプロジェクトは3つの施策で構成されています。1つ目は「農業を通じた生きがいづくり」、2つ目は「料理を通じた生きがいづくり」、3つ目は「発表を通じた目標づくり」です。

それでは、この3つの施策について説明していきます。

1つ目の施策は「農業を通じた生きがいづくり」です。現在、京田辺市には919の農家があります。この農家数は年々減少しています。また、京田辺市には地元の農家団体が運営する3つの市民農園があります。しかし、市民農園は、利用者は農地を借りるだけなので、農業初心者の方が利用するには少しハードルが高いという声は街角インタビューで多く耳にしました。

そこでこのような状況を改善するために、「農業体験農園」を開園します。農業体験農園とは、野菜作りのプロである農家が園主となり、この園主の土地を利用者が園主の指導に従って、日常管理から収穫までの一連の農作業を体験できる消費者参加型の農園です。農業体験農園は、東京都練馬区の農園が発祥であり、私たちは実際に現地へ出向き、その農園の経営者である白石好孝（よしたか）さんに直接お話を伺いました。

そのお話の中では、市民農園は、利用者の好きな作物を育てることができますが、基本的に管理者が利用者へ、作物の育て方などのアドバイスをすることはなく、一方で、「農業体験農園」は、管理者が利用者に対して、種の播き方や、耕し方などを講習会を開いて丁寧に指導する。そのため農業初心者の方でも安心して利用でき、利用者の方は収穫する楽しさを感じられているそうだ。また、利用者同士の交流イベントを開催している、ということでした。

それを踏まえて、まずは農業体験農園を開園できる環境づくりとして農家への補助金制度の整備や農家組合との連携を強化します。そして、体験農園を開園したい農家の方に開園していただきます。また、京田辺市にある既存の市民農園と並行して農業体験農園を運営すると、現在市民農園を利用している方のニーズにも応えつつ、農業初心者の方のニーズにも応える形をとります。

このように「農業体験農園」を運営していけば、農業を通じて命を育て、収穫する楽しさから生きがいを得ることができますし、農業をすることによって体を動かすことができるため、運動を通じた健康づくりができると期待できます。

また、市民の方からのニーズが高まっていった場合には、京田辺市内にある耕作放棄地を活用していけば、耕作放棄地の解消につながるのではないのでしょうか。さらに、農業体験農園の利用者が、農園を利用したことをきっかけに農業に興味を持ち、農家に転身するということができれば、農家の後継者不足の解消につながるかと考えています。

2つ目の施策は「料理を通じた生きがいづくり」です。ここでは主に農業体験農園で採れた野菜を使った料理教室を開催します。料理教室の講師には、地元の料理好きな方などを募集します。開催する頻度については市民のニーズによって調整します。開催場所としては、調理室がある住民センターや公民館、子どもセンターを利用します。この料理教室では、様々な世代の方に参加してもらい、郷土料理を作ったり、考案した創作料理を作ったりします。

ここで様々な世代の方が料理を教えあったり、一緒に食事をしたりすることによって、住民の交流の場をつくることができます。京田辺市の特産品である、田辺なすは夏に、えびいもは冬に収穫でき、このような旬の食材を使った料理を作ります。

また、料理教室で郷土料理を作ることによって、郷土料理を継承することができます。加えて、地元で採れた食材を使うことにより地産地消が促進され、食を通じた健康づくりができると期待できます。

3つ目の施策は「発表を通じた目標づくり」です。ここでは3部門の発表会を、産業祭や、同志社大学の学園祭、市民文化祭などで開催しようと考えています。この発表会は、各イベントの主催者と農家が連携して行います。

1つ目の野菜部門では、主に農業体験農園で作られた自慢の野菜を出し合います。審査員はこのような農業に詳しい方々の中から無作為に選出します。また、審査員には一般市民や学生を作り、様々な視点から判断し、入賞者を選考していただきます。

2つ目の写真部門では、自分の農園や庭で育てた野菜や花などの写真を提出してもらい、それを展示します。写真部門では、来場者の投票によって入賞者を決定します。また、写真の展示にすることで、様々な季節の作物を一度に楽しむことができます。

3つ目の創作料理部門では、市民の方に主に農業体験農園で育てた作物を使った、創作料理のレシピを考案していただきます。そして、その料理を調理室がある住民センターや公民館で、実際に調理していただき、審査員が試食します。ここでの審査員は野菜部門と同じような形を考えています。審査の結果、入

賞した創作料理のレシピは、広報誌や SNS で発信します。また、産業祭にも出品します。これにより、多くの方に地元で採れた野菜を美味しく食べてもらうことが可能になり、地元野菜の魅力を知っていただくと考えています。

それぞれの部門の入賞者へは、一例として、玉露などの市内の特産品をプレゼントします。そうすることで、市民の方々がより京田辺市のことを知ることができ、地元愛にもつながるかと思います。

この発表会は、農家の方だけでなく、一般市民が自分で育てた野菜で参加することができるため、農業振興にもつながると考えています。また、この3つの部門があることによって、自分で育てた野菜を料理で利用し、発表会でその野菜自体や料理を披露する、というサイクルが形成されます。このように野菜を育てて料理する、という単純なつながりから、作ったものを披露するという段階を経ることによって、野菜を育てることにおいても、料理することにおいても、やりがいが生れます。そしてこのやりがいが生きがいにつながると考えています。

以上この3つの施策が「京田辺生きがいプロジェクト」になります。

今までの話を最後にまとめますと、この「京田辺生きがいプロジェクト」の、1つ目の「農業を通じた生きがいづくり」の施策では、農業体験農園を整備することで、講習会で利用者同士が会う機会を作ることができ、農家同士、農家と利用者との間、利用者同士などのコミュニティが構築されます。また、2つ目の「料理を通じた生きがいづくり」の施策では料理を学び、色々な世代の方々と一緒に食事をすることによって多世代のコミュニティが構築されます。3つ目の「発表を通じた目標づくり」の施策では、発表会に出場して、披露するという目標を持って農業や創作料理の考案をすることができますと考えます。

このように、それぞれの施策で構築されたコミュニティが、ほかのコミュニティとつながりを持つことによって、重層的なコミュニティができると期待されます。

実際に天王地区で、農地を借りて農業をしている方々の様子を見たり、お話を伺ったりしました。利用している方々は、自分たちが育てた野菜の写真を楽しそうに見せてくださったり、利用者仲間とおしゃべりしていたりして、とてもいきいきと活動されていました。「これが生きがいだ」と皆さんおっしゃっていて、このようなコミュニティがもっと広がっていけばいいのにと強く思いました。

また、このようにコミュニティが構築されることによって、仲間ができて、高齢者の社会的居場所を確保することができるようになります。また、仲間ができることによって、有事の際に助け合うことができるようになり、高齢者でも安心して暮らすことができるまちになっていくのではないかと考えています。これこそが私たちが考える超高齢社会を支えるコミュニティの構築です。

これで私たちの発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

全19チームの発表が終了し、結果発表の時間となりました。私たちは最優秀賞を獲得することを目標に今まで努力してきました。そのため、この時間は待ちに待ったものでした。しかし、名前を呼ばれることはありませんでした。賞を取ることができなかつたとき分かったときには、とても悔しい気持ちで一杯でした。しかし、それと同時にやれることはやったため、やりきったという達成感も感じました。

賞を取ることができませんでしたが、それ以上に、発表するまでの過程で学んだことが沢山あったため、このフォーラムに参加してよかったと思いました。



発表終了後の様子 素晴らしい発表でした

フォーラム終了後、藤井先生行きつけの焼肉屋さんで打ち上げを行いました。やりきったという思いと開放感の中で食べたお肉はいつも以上に美味しく感じました。



慰労会の様子

3月5日

最終日は、日本三景の1つである天橋立を望む笠松公園を観光した後、藤井先生の研究フィールドの1つである京丹後市大宮町の奥大野地区を訪れ、「最先端の田舎」を目指して奥大野区長として活動されている川口勝彦さんにお話を伺いました。元行政マンという経歴を生かして、地域のために活動されている姿は大変素晴らしいものでした。

その後、大宮町上常吉の商店である「つねよし百貨店」を訪れ、運営者である東田一馬さんにお話を伺いました。つねよし百貨店が地域の情報のハブとなり、コミュニティが構築されているとのこと。実際にヒアリング中も多くのお客さんが来店していました。さらに、東田さんの奥様である真希さんは京丹後市議会議員であり、政治家という視点から様々なお話を聞かせていただきました。特に、「現場を見ていない行政マンにはならないで欲しい」という言葉が公務員を目指す自分たちにとっては印象的でした。



天橋立・笠松公園にて



つねよし百貨店でヒアリングの様子

参加学生の声

法学部 政治学科2年 岡田悠志君

今回、私が政策フォーラムに参加するのは昨年8月に行われた、「全国大学まちづくり政策フォーラム in 登別」に引き続き2回目でした。その登別の大会では入賞を逃してしまったので、そのリベンジの思いで、このフォーラムに参加しました。前回とは違い、私がリー

ダーとなり調査、研究をしてきました。初めの方は、どうしていいか分からず戸惑った部分がありましたが、他の 2 人の仲間に支えてもらいながら最終的に発表までたどり着くことができました。

春休み期間であるというのにも関わらず、週に 2～3 回ほどのペースで学校に集まり、朝から夜まで調査に費やし、少しずつ政策を形にしていきました。時には京田辺市役所の方へメールで質問をしたり、市民農園の管理者の方へ電話をしたりなど、普段の勉強とは違う経験をしました。これも政策フォーラムに参加しなければ経験できないことであると思います。

現地調査では、駅前での街頭アンケートや農家の方に直接お話をお伺いし、自分たちの政策が本当に京田辺市の実情にあっているのかどうかを確認することができ、自信をつけることができました。

発表の際、高橋くんがスライドを動かし、大乗さんが原稿を元に発表してくれました。緊張したと思いますが、全て予定通りに進み、本当に感謝しています。質疑応答の際、私が質問に答える予定でしたが、緊張してしまい、うまく答えることができず、そこに反省点、課題が残りました。何はともあれ、無事発表を終え、緊張から解き放された時は自然と笑顔がこぼれました。これが「やりきった」という感情であるのだと再認識しました。残念ながら入賞という形の残る結果は得られなかったものの、このフォーラムを通じて得たものは必ずこれからの大学生活、その先の人生において自分の力の源になると思います。

最後に、このフォーラムの全てにおいて手厚くサポートしていただいた、藤井先生、忙しい中スライドを作成してくれた高橋くん、原稿を書いてくれた大乗さん、質問に真摯に答えていただいた京田辺市役所の農政課の方、京田辺市民の方々、並びに関係者の方々、ありがとうございました。この経験を生かしさらに学習を深めていきます。

法学部 政治学科 2 年 大乗梨那さん

私は今回政策フォーラムに初めて参加しました。政策フォーラムはかなり大変だと岡田君から聞いていたため、少し不安もありましたが、元々興味があったため参加してみようと思いました。

事前準備は合計 10 回行い、毎回たくさん話し合いました。回数を重ねるごとに私たちの考える政策が出来上がっていくことが嬉しかったです。事前準備を行う上で、電話でヒアリングを行うことができました。私は今まで会ったことがない人に電話を掛ける、という経験をあまりしたことがなかったため、電話することにとっても緊張しました。しかし、何度か電話を掛けていくに連れて、だんだん慣れることができました。

また、私は発表者だったため、発表原稿を書きました。発表原稿を書くに当たって、発表する時は何も知らない人たちに説明しなければならないため、ひとつひとつの説明をわかりやすくしなければならないことに加え、私たちが考えたことや調べたことを 11 分という限られた時間で伝えることができないといけなかったためとても難しかったです。そのため発表原稿を書くことにとっても時間がかかってしまい、岡田君と高橋君には迷惑をかけてしまったなと思います。

京田辺市での現地調査では、「まちづくり市民ねっと京田辺」の方から、農家の方や、農業体験農園のようなことを実際に行っている方に繋いでいただき、生の声を聴いたり、現地

に出向いて実際の様子を見ることができました。元々市民ねっとの方のお話を聴ければいいと考えていたため、そこからその他の方に繋いでいただけたことにとても驚きましたし、人の繋がりには凄いと思いました。また、天王地区で農業を生きがいに行っている方々の様子を実際に見た時は、私たちが考えていた政策が実現したらこのようになるのではないかと、と思いました。

発表前日の夜は原稿とパワーポイントの調整を行い、その後はひたすら発表練習をしました。何度も同じ文章を読むことは意外と大変でしたが、発表で失敗してしまったらこれまでのみんなの努力が無駄になってしまうため、それを避けるためにも頑張ろうと思いました。

発表当日は、私たちの番になるまでそこまで緊張しませんでした。いざステージに上がるととても緊張して、原稿の字がぼやけて見えにくくなってしまいました。しかし、これまでの練習と努力が自信となり、無事発表を終えることができました。

結果としては、賞を取ることができず、とても悔しかったですが、この京田辺フォーラムを経て、政策を作り上げる大変さはもちろん、現地の声を聴く重要性を感じました。また、電話でのヒアリングなど、普通に学生生活を送っているだけではできない経験をすることができました。このフォーラムで学んだことを今後の生活に活かしていきたいと思います。

法学部 政治学科2年 高橋 祐介君

自分は今までに、政治学科アクティブラーニングプログラムでは「東北プログラム」と「沖縄プログラム」に参加してきましたが、今回のような現地でプレゼンをするという形のは初めての経験でした。初めて3人で集まった際、藤井先生に「今回は最高のメンバーが揃っている、賞を取りに行こう。」と言われ、自分が他の2人の足を引っ張らないようにしなければいけないプレッシャーを感じていました。

春休み中でありながら、板橋キャンパスでの打ち合わせは計10回行いました。今回は「京田辺生きがいプロジェクト」を政策とし、①農業②料理③発表という3つの施策を提言するという形でしたが、議論の過程ではどうしても1つの施策の内容を充実させることに偏ってしまったり、「政策・施策」ではない単なる「事業案」に近いものになってしまったりと苦労も多くありました。しかし、京都へ出発する前には発表原稿やスライド資料もほぼ完成に近い状態まで仕上げる事が出来、非常に順調に事前準備が進められたと思います。

現地での調査活動も大変充実したものになりました。個人的に特に感動したのは、天王地区で実際に体験農園に参加している方々の様子を自分の目で見る事ができたことです。お年を召された方ばかりでしたが、携帯電話のカメラで撮影した収穫物の写真を嬉しそうに自分たちに見せる様子は、まさに「生きがい」だと感じました。アクティブラーニングプログラムに参加する度に思うことですが、現地に行って自分の目で見ることは本当に重要なことです。

調査活動後の原稿やスライドの修正、発表の練習は深夜1時ごろまでかかりました。幸いにも現地での「どんでん返し」には遭わなかったため、事前に準備した内容をさらに充実させることができました。自分はスライド担当の為、如何に見やすく伝わりやすいものにするかという点を重視して作成に臨んだつもりです。ここまで真剣にPowerPointを触ったのは今回が初めてだったかもしれません。

残念ながら結果は入賞ならず、という形になりましたが、それ以上に多くのものを得られたことは確実です。発表後の打ち上げで飲んだエビスビールと焼肉は格別でした。このような良い思いができたのも、経験者としてチームを引っ張ってくれた岡田君と、素晴らしい原稿を作成しプレゼンターを務めてくれた大葉さんのおかげです。こんな優秀な 2 人と一緒に活動ができて自分は本当に幸せものです。

また、アイルランド在外研究前の忙しい時期でありながら、ご指導、引率いただいた藤井先生には感謝の一言に尽きます。今回も本当に良い体験ができました。ありがとうございました。